

草 雲 雀

一寸の蟲にも五分の魂。日本の諺。

雀 雲 草

その籠は正しく高さが二寸で幅が一寸五分。軸があつてそれで廻る小さな木戸は自分の小指の尖頭がやつと入る位。だが、彼には此籠の中に十分の餘地が——歩んだり跳ねたり飛んだりする餘地があるのである。といふのは、彼を一瞥せん爲めには、この褐色紗張りの横面を透して、非常に注意して見なければならぬ程、彼は小さいからである。自分は其居場處を見つけるまでには、十分な明かりで、何時もその籠を幾度も廻して見なければならぬ。するといつも上の片隅に——紗張りの己が天井に、身を逆か様に、抱き付いて——ちつとして居るのが分る。

自分の身體よりか遙か長い、そして日に透かして見なければ見分けられぬ程に細い、一對の觸角をそなへた、尋常の蚊の大きいさ位の蟋蟀を想つて見給へ。クサヒバリ即ち『草雲雀』といふのが彼の日本の名である。そして彼は市場で正に十二錢の値ひを有つて居る。即ち、自分の重さの黄金よりか遙かに高價である。こんな蚊のやうな物が十二錢!……

毎朝その籠へ差し入れてやらなければならぬ新しい茄子か胡瓜かの薄片に取り付いて居る間を除いて、彼は日のうちは睡るか冥想するかして居る。……綺麗にして、そして食物を十分にして、

飼つて置くことは少々面倒である。彼を諸君が見得るなら、こんな可笑しい程小さな動物の爲めに、少しでも骨を折るなど馬鹿馬鹿しいと思ふであらう。

だが、日が暮れるといつても、彼の無限小な靈が眼覺める。すると、言ふに言はれぬ美はしい美妙な靈的な音樂で——非常に小さな電鈴の音のやうな、微かな微かな白銀しろぎんなすりりリンと震ふ聲音で——部屋が一杯になり始める。暗黒やみの深くなるに連れて、其音は層一層美はしくなり、——時には家中がその仙樂に振動するかと思へるまで高まり——時には想ひも得及ばぬ微かな極はみの絲の如き聲音に細まる。が、高からうが低からうが、耳を貫く不可思議な音色を續ける。……夜もすがらこの微塵はそんな風に歌つて、寺の鐘が明けの時刻を告げる時やつと啼き止む。

さて、この小さな歌は戀の——見もせず知りもせぬものを戀する漠たる戀の——歌である。彼の此世での生涯の中に、いつか見又は知つた譯は更に無いのである。過去幾代のその祖先すらも、野原での夜の生活も、また、戀に於ける歌の價値も、少しも知り得た譯は無いのである。彼等は蟲商人の店で、土の壺の中で孵つた卵から生れ出たもので、その後籠の中だけに棲んで居たものである。だが、彼は幾萬年の古昔、歌はれた通りに、しかもその歌の一節いちせつ一節の確實な意味を了解してでも居るやうに少しの間違ひも無く、歌ふのである。固よりのこと、歌を歌ふことを學びはしなかつた。それは有機的記憶の——その魂が夜毎小山の露けき草陰から、高音を響かせた時の、幾千萬代の生涯の深い臍氣な記憶の——歌なのである。その時はその歌が戀を——そしてま

た死を——もたらした。彼は死に就いては全く忘れてしまつて居る。が、その戀は記憶して居る。だからこそ彼は——決して來ては呉れない新婦を求めて——今、歌ふのである。

だからして、彼の戀慕は無意識的に懷古のものである。彼は過去の塵土に叫んで居るのである——沈黙と神とに時の歸り來たらんことを呼ばはつて居るのである。……人の世の戀人も、自分ではそれと知らずに、頗るこれに似たことをして居る。人の世の戀人は其迷ひを理想と呼んで居る。ところが、彼等の理想なるものは、畢竟するに種族經驗のただの影であり、有機的記憶のまぼろしである。生きて居る現在は、それには殆んど無交渉である。……この微塵の小動物もまた理想を有つて居るか、又は少くとも理想の痕跡を有つて居よう。が然し、兎も角、其小さな願望は、其哀求を徒らに述べざるを得ぬのである。

その咎は全く自分だけのものでは無い。この者に配偶を與へると、啼かなくなり、且つ直ぐに死ぬるといふ警戒を、自分は與へられて居たからである。ところが、夜毎夜毎、その應答の無い美しい哀求の聲は、非難の聲のやうに自分の胸を衝いた——しまひには苦痛となり、苦惱となり、良心の呵責となつた。そこで雌を買はうと試みた。季節が遅かつたので賣つて居るクサヒバリは——雄も雌も——もう一匹も無かつた。蟲商人は笑つて『九月の二十日頃には死んだ筈ですが』と言つた。(此時はもう十月の二日であつた)然し蟲商人は自分の書齋には上等の煖爐があつて、いつも溫度を華氏七十五度以上にして居ることを知らなかつたのである。だから、自分の草雲雀は十一月の末にもなほ啼いて居るので、自分は大寒の頃まで生かして置かうと思つて居る。が然

し、彼の代だいの他の者共は、多分、死んで居よう。金づくにも何づくにも自分は、彼に今、配偶を求めるとは出来なからう。それからまた、自分で捜せるやうに、放つてやれば、日の中は庭に居るその多勢な自然の敵——蟻や百足蟲や恐ろしい土蜘蛛——の手を幸運にも免がれたせても、ただの一と夜も明けまで到底も生きて居ることは出来なからう。

昨夜——十一月の二十九日——机に對つて居ると妙な感じが——部屋が空くうな感じが自分を襲つた。やがて、自分の草雲雀が、いつもと異つて、黙つて居ることに氣が付いた。無言なその籠へ行つて見たら、彼は小石のやうに灰色に堅くなつた乾からびた茄子の薄片の横で、死んで居た。確かに三四日の間、食べ物を貰はなかつたのである。だが、ついその死ぬる前の晩、彼は驚く許り歌つて居たのであつた——だから、愚かにも自分は、彼はいつもよりも満足して居るものと思つて居た。自分の家の書生の、アキといつて、蟲を好いて居るのがいつも彼に食物を與へてゐた。處が、アキは一週間の休暇を貰つて田舎へ行つたので、草雲雀の世話つとめをする義務は下女のハナに委ねられたのである。同情深い女では無い、下女のハナは、その小さな物のことは忘れはしませんでしたが、もう茄子がありませんでしたと云ふ。そしてその代りに葱か胡瓜の薄片を與へることを考へなかつたのである!……自分は下女のハナを叱つた。そして彼女は恭しく悔悟の意を述べた。だが、仙郷の音楽はやまつてしまつた。寂寞が自分の心を責める。部屋は燐燼があるに拘らず冷たい。

馬鹿な！……麥粒の大きいさの半分も無い蟲の爲めに、善良なる少女を自分は不幸ならしめたのだ！ あの無限小な生の消滅がこんなにもあらうと信じ得られなかつた程に、自分の心を惱ます。……固よりの事、ある動物の——蟋蟀のでも——其欲求について考へるといふただの習慣が、知らず識らず次第に、一種想像的關心を——關係が絶えてから始めて氣の付く一種の愛著の念を——牛むのかも知れぬ。その上また、その夜がひつそりして居たので、その微妙な聲の妙味を——その微小の生は、神の恵みに頼るやうに、余の意志に、余の利己的快樂に、頼つて居るのであると語り——その小さな籠の中なる微塵の靈と、余が體內なる微塵の靈とは、實在の大海に在つて永遠に同一不二の物であると語る——その微妙な聲の妙味を特に身に沁みて感じたのであつた。……それからまた、彼の保護神の思想が夢を織り成すことに向けられて居る間、日日、夜夜、食に飢ゑ水に渴して居たその小生物のことを思ふといふと！……嗚呼、それにも拘らず、最後の最後に至るまで——しかも慘憺たる最期であつた、自分の脚を嚙んで居たから——如何に雄雄しく歌ひ續けて居たことか！……神よ、我等凡てを——殊に下女のハナを——赦し給はん事を！

だが、要するところ、飢餓の爲めに自分で自分の脚を嚙むといふ事は、歌の天稟を有つといふ呪詛を蒙つて居る者に出來し得る最大凶事では無い。世には歌はんが爲めに自分で自分の心臓を食はねばならぬ人間の蟋蟀が居るのである。

(大谷正信譯)

Kusa-Hibari. (Kotto.)